

現代中國佛教の生活規範

——特に靈巖山寺における——

牧 田 諦 亮

は し が き

昭和三十三年秋、私は約二カ月にわたつて、中華人民共和國成立後の、新中國の佛教を視察する機會を得た。共產主義を建國の大方針とするこの中國で、佛教がいかなる形態で存在しているか、僧侶がいかなる日常生活を送っているかということは、誰しもが抱く疑問であることは申すまでもない。私も旅行中に、この觀點に自分の注意を集中もしてきたし、また若干の參考資料もあつてきたのである。今日主として、中國僧侶の日常生活の指針となつてゐることからについて、江蘇省蘇州木瀆鎮靈巖山寺の、それを中心として報告したい。ここに、ことさら生活規範としたのは、中國においては、普通に日常生活そのまゝが、遠くは百丈懷海の清規にもとづく中國的な意味での戒律生活であるが、日本佛教においては、それを育ててきた環境の相違や、民族性としての宗教觀念の受容の度合の等差などから、僧侶の日常生活は、そのまま戒律生活とは結び得ないものがあるからである。

共產主義中國において、その存在が許されている佛教々團としては、その存在の大前提に、共產主義に奉仕すること、理想的には共產主義そのもののなかに溶けきつてしまうことが要求される。従つて佛や祖師たちのさとされた戒

律生活のまゑに、共產黨の鐵の規則が嚴存するこゝたは、今日もそうしたことは、今日の共產主義治下の中國においてのみではない。思想の立場からは、根本的な相違のあることは勿論であるが、中國の永い歴史の中に、時の主權者に對して佛教々團の指導者たちが如何に對應したかの歴史をふりかえつてみれば、よく諒解されることである。

大醒法師（一九〇四—一九五二）は生前、日本佛教視察のために來朝したこともある人で太虛門下の逸材として知られていた。

彼の編輯した覺津雜誌第六號は、中華民國二十六年（一九三七）五月十五日（シナ事變勃發の二カ月前）に、江蘇省淮陰の覺津寺（大醒師の自坊）で發行されている。その内容は國民黨部や政府の指導下に、戰爭直前の險惡な事態をそのまま反映して、僧訓（僧侶の軍事訓練）特輯號となつている。卷頭で、大醒は、「衆生無邊誓願度といい、法門無量誓願學という、これを廣義に解釋すれば、現在われわれが受けようとしてゐる一切の政治的軍事的の知識も、當然學習しなければならぬものであるし、たとえ將來我々が戰爭に参加することになつても、その實は、まさに度衆生となるのである」と言つてゐる。本稿においても、中國共產黨政權樹立後のこのような問題には、當然論ぜなければならぬものではあるが、今は敢てこれにふれないのは、未だその時期にあらずと思ふからである。

一

新中國の佛教々團は、北京にその本部がある中國佛教協會が、一切の統制・運営を掌握してゐる。形式的には民間團體として、政府機關とは完全に區別されている。然し政府、直接的には國務院宗教事務局の嚴重な監督下にあることとはもとよりである。省や重要都市にはその分會が、所在地の地名を冠して、例えば上海市佛教協會などと呼ばれて

設立されている。「現代佛學」はその唯一の指導雜誌で、本年八月現在で、毎月四二〇〇部刊行されている。この雜誌の編輯者の一人である石鳴珂居士は、かつては芝峰法師と名のつた名實備つた僧侶であつた。石氏は浙江溫州の人で、一九〇一年の出生であるから、本年五十八歳となる。近代中國佛教改革運動の第一人者たる太虛大師の高足である。武昌佛學院を卒業し、特に唯識・天台・律宗について研究を重ね、唯識三十論講話・佛性研究・律學之精神・律學大綱・唯識學源流などの著譯書もある。また現代佛教（廈門）・海潮音（武昌）などの佛教雜誌の編輯に従事したことがあり、かつ廈門の閩南佛學院教務主任・武昌の世界佛學苑圖書館の編譯主任を経歴した。（民國二十四年一月刊海潮音月刊、十五年來之僧教育）また藤井草宣氏の配慮によつて、大谷大學にも留學したことのある、いわば現代中國佛教界における代表的な僧侶の一人であつた。日本留學後、感ずる所があつて、還俗して妻帶し、しかも熱心なる佛教居士として、日々素菜の簡素な生活を送りつづけてきている。中國佛教の新しい發展のためには、妻帶し、結婚生活を送るべきであるとの立場からのである（石氏のこの考えは、すでに昭和十年頃、藤井草宣氏等の影響を受けたのではないかと思われる。昭和十一年七月發行日華佛教第四號には、藤井氏が閩南佛學院で芝峰、常惺法師等と會談し、ことに僧侶の妻帶問題で、常惺師等と意見を交換していることは注目せねばならぬ）。この石氏がまだ芝峰であつた頃に、彼が二十歳から三十四歳（民國九年から同二十三年）までの、十五年の自己の生活を回顧した「十五年來生活之片斷」なる一篇を、民國二十四年一月刊の海潮音月刊第十六卷一號に登載している。彼自身の生活記としてのみでなく、また同時代の活きた中國佛教史としても興味深いものである。

民國十八年夏、私は亦幻や顯微とともに蘇州に行き、七月初旬には杭州に赴いて、（西湖にひらかれた）全國博覽會を參觀した。たまたま蕙庭法師が昭慶寺に居て、浙江僧學院の運営を擔當して一年近いときであつた。學僧は四十名ばかり、その所要經費はすべて浙江省佛教會が諸大寺に依頼して得た寄附金收入によつていた。その時、蕙

法師は私、に次のような内緒の話をした。

折しも浙江佛教會の獨斷的な運営に當つていた某居士が、あることで諸大寺から信任されず、僧學院の經費も出して貰える見込がなくなつた。現在學僧達は夏休み中で、各地の小寺廟にかえつてゐるが、秋期の開講はとも見込みがない。今後おそらくこのような僧學院の再開は、不可能であらうということであつた。

ところで、杭州では西湖に沿うて大小の寺院叢林が非常に多く、毎年農閑期の二・三月の候には、おまいりの人のやかましい聲で日をすごすのである。その収入は頗る豊かであり、十分その寺の一年中の費用に足りるといわれる。上天竺寺・中天竺寺・下天竺寺・靈隱寺・淨慈寺などはその収入はことに多い。このなか、靈隱寺・淨慈寺は住僧も多く、そのための支出も非常に多いから、相當の収入がなければ、寺を維持してゆくことは容易ではないのである。しかるに三天竺にいたつては、まことに甚しく奇怪と言わねばならない。私達が寺へ行つた時には、一人の出家者にもあわなかつた。おまいり時の収入は、どの寺よりも多く、毎年十數萬元（民國十八年、今から三十年前）の収入がありながら、一人の出家人もいないとはどういうことであらうか。後でわかつたことであるが、これは全くでたらめで、三天竺寺の和尚たちは寺に居らないのである。たとえ寺に居つても斷じて我々凡夫の肉眼ではみつけだすことはできないであらう。何故ならば、彼等は完全に僧侶の服裝を改めて俗化してしまつてゐるからである。彼等はすべて、家庭と妻子と一般世俗的な享樂とを持つており、一年間の寺の収入は、すべて彼等の囊中に歸してしまふのである。寺の堂宇が破壊しようと、御本尊様の金色が剥げようと、すべて我關せず焉の有様である。しかも、なおかつ、參拜客の多い時機に、少しでも多く金をむさぼりとうとする。我々は、いたるところで再建費募集とか、御本尊様の塗りかえ費用募集とか、供養料勸募とかの標語に似た、ピラを見ないわけにはゆかないのである。彼等は毎年毎年このような、ものなれた芝居をしては、また収入をふやしているのである。しかも寺の

堂宇とか御本尊様は前にも増したひどい荒れかたである。これは、社會がわが佛教に與えた罪惡であろうか、はたまた、わが佛教が社會に與えた罪惡であろうか。

と、大いに悲憤慷慨の情を述べている。この三天竺寺の住持のごとき、妻帶の僧侶は、戒律を第一條件とする中國佛教においては一見考えられない存在のように思われがちである。もちろんすでに明・清の頃に、火居僧・赴應僧と呼ばれる妻帶僧の存在が、歴史的にも證明されるのであるが、もとよりそれは邪道である。然し最近の中國では、このような事例はかなり見られたようである。現に北京法源寺にある中國佛學院の副院長であり、太虚師の高足である法尊師も、僧侶の妻帶に反對の意見であつたことは、吉岡義豐氏も指摘している（智山學報第一集現代中國の密教信仰參照）。また上述の常惺師のように、眞劍に僧侶の妻帶について考える人もあつたのである。そして後に芝峰法師は、彼自身の信念にもづいて、結婚生活をしたのであるが、なお出家と在家の區別を嚴守して、僧籍を脱し、しかも僧侶以上の佛敎學の學識と信行とを兼ねそなえた居士として、今日にいたつてゐるのである。

また民國二十六年二月に出版された大醒主編の覺津雜誌第四號には、大醒の説として、「學僧應注重禮節」なる一篇の論説がかかげられている。禮節は人間生活にあつては非常に重要なものであり、禮節こそ社會進化を將來する、一種の原動力であるとするのである。この禮節は宗教者特に佛教徒にとつても非常に重要なものであることは、すでに釋尊在世中に佛の説法の座にいたるごとに、弟子たちはまず佛を禮し、再跪して説法を請い、説法が終ると弟子はまた「作禮而去」する。古來多くの大徳の僧が、論を作り經を釋する時にも、必ずまず三寶を禮讃するのが常であつた。われわれ現代の佛教徒は、この禮節を重視すべきであり、これを忽略にすることは許されぬとして、佛を禮敬する・法を禮敬する・僧を禮敬する・師を禮敬する・友を禮敬するの五事を擧げているのである。

もともと「整理僧伽制度論」を著して、敎團の新しい發展を企て、新しい生活規範を作るために、その一生を捧げ

た太虚大師の高足が、この大醒・芝峰である。芝峰の慷慨といい、大醒の五事の禮敬といい、彼等がにがにがしきもの、まさに行わねばならぬこととしたものは、本來は僧侶として、當然守るべき生活の中には、もはや問題とはなり得ないものばかりである。しかも、それが現下の僧侶生活の中に、重要な問題として、採りあげられているのは、現代中國佛教者の直面した日常の戒律生活・生活規範についての深刻な反省と言えるのではなからうか。

一一

周知されているように、古制の戒律とは別に、中國佛教史上に始めて見られる、僧侶の日常修道生活に關する諸規制は、梁高僧傳の道安傳や、隆興佛教編年通論卷三等に見られる、僧尼軌範並に法門清式二十四條である。それ以後の僧尼の生活規範を記した清規類の變遷については、我が無着道忠師の百丈清規左觴に詳しい。中國僧侶の共同生活にふさわしい集團生活の規範は、外來佛教のきずなから脱した、中國佛教の獨立といった觀點からも考察されなければならぬのは當然である。ことに禪宗における四祖道信前後からの、叢林を中心とする集團生活において、しらずしらずの間に、習積された生活規定をまとめたと思われる、懷海（七四八—八一四）の百丈清規の編纂制定は、爾後の禪宗のみならず、ひろく中國佛教界の依據する所となつたことは、時代的にも翻譯佛教の羈絆を離れた、中國人の佛教を考察する上にも、不可缺の條件となるのである。古來有名な「一日不作一日不食」の格言は、實は山林に相當數の僧侶を擁した教團が集團生活をする時に、官供や布施のみに依頼するわけにはゆかず、當然自給自足が前提となつてゐることを考えて、始めて眞實の意味が理解されるのである（禪學研究第四十四號、大石守雄氏稿、古清規について参照）。以後の清規類の變遷については、今日述べる必要もないが、元の德輝（一一三三—一三五）の勅修百丈清規や、明末の雲棲株宏（一五三二—一六二二）によつて集大成された雲棲共住規約（雲棲法彙第三）（十二冊所收）が、中國近世の教團に共通した生活規範の大本となつ



蘇州靈巖山寺大雄殿

たことは、太虚の異論はあるにせよ（海潮音民國二十四年一月號）、なおそれを認めないわけにはゆかないのである。雲棲株宏の共住規約の成立については、別に發表の用意があるため、これを省略する。勅修百丈清規や雲棲共住規約等にもとづいて、かつそれぞれの環境に應じて作成されたのが、今日の各義林大寺の規約となっているものである。たとえば民國三十年三月、北京の興亞宗教協會において出版した華北宗教年鑑におさめた叢林各處規約のごときも、華北の各大寺にほぼ共通した生活規範である。

三

佛刹を訪ねた（昭和三十三年八月、毎日新聞社刊佛教藝術（第三十五號の拙稿、新中國佛蹟の旅參照））。

それぞれに有爲轉變の相が見られて、いかにも諸行無常の言葉の通りに感ぜられた。以前とは政治的・思想的・社會的にも大きな環境の變化があり、かつ農繁期に入る頃であつたから、杭州方面でも、芝峰法師の見聞したような香客（おまいりの信者たち）の姿はあまり見られなかつた。ことに、例の三天竺にいたつては、その寺宇は荒廢し、人影もまばらで、二三の僧侶を見るにすぎない有様であつて、いわゆる天竺進香（三天竺まいり）の俤は偲ぶよすがとてない有様であつた。ようやく浙江天台山國清寺や、江蘇靈巖山寺にいたつて、古叢林を訪ね得た感懷を得たのである。

靈巖山は、蘇州の西南郊十三キロほどの地點の木瀆鎮にある三〇〇メートルほどの小高い山で、古來、越王勾踐・

吳王夫差や、西施美人などの物語りでみたまされている。寺としての歴史も、傳説では、東晉の末に、司空陸玩が自分の宅を喜捨して寺となし、梁の武帝の天監年中に、またこれを擴充して秀峯寺とし、大哀經に見える智積菩薩應化の道場として知られた。泗州の僧伽和尚がこの山に教化を施そうとして無錫まできて、智積菩薩の教化のあることを知つて、ひきかえしたなどの説話も行われていて、江南の名刹として知られていた。清の咸豐十年（一八六〇）、江南の地を席捲した洪秀全の時に、他の多くの寺々とともに燒毀され、僅に宋の太平興國三年に孫承祐によつて初めて建てられ、しばしばの重修を経た九層の多寶塔のみが残されたのである。その後、永く荒廢していたのを、眞達法師が宣統三年（一九一）住持として迎えられて、漸く復興のうごきが見られることとなつた。今日のすこぶる整頓した諸堂宇のほとんどは、師と、そのもとに監院であつた妙眞（現住）師の世代に、諸方の淨財を得て完成したものである。ことに中國近代淨土教の大導師印光法師が、眞達師と數十年一日のごとき莫逆の交りのあつたことから、この寺に化縁を結ぶこととなつて、靈巖の道風が一時に全中國に知られることとなつたのである。

印光の「靈巖寺永作十方專修淨土道場及此次建築功德碑記」によると、民國十五年（一九二六）、この寺は、印光法師の勧めによつて、當時の中國には珍しい十方專修淨業道場として、專修念佛の行者のために開放されて、講經・傳戒・傳法・徒弟養成・經懺等のことはせず、専ら稱名念佛のみを宗旨としたのである。後に擧げる靈巖山寺共住規約の、根本的な五カ條にも明記しているように、專修念佛の妨げとなる經懺（水陸法會のたぐい）は、本來靈巖山寺では堅く禁ぜられている。もともと當寺の復興は、眞達師の努力に依るものであるが、民國十五年頃で、寺の收入としては田租（小作料）が年間八・九百元があるのみで、漸く二十人の僧衆の生活を支え得るにすぎなかつた。しかし靈巖山の道風があがるに従つて、風光明媚な當山で、佛七の法會を求める檀越が多くなり、僧衆もまた四十人をこえるにいたつた。ここに漸く諸堂宇の建立も始り、念佛堂・鐘樓・大法堂等が完成したのである。佛七とは、施主の依

頼によつて、薦先亡（祖先の追善供養）と祝親壽（父母の延壽祈願）のために、往生位・延生位の二位牌をまつり、七日間に亘つて特別に修する法事で、いわば祖先崇拜と親孝行という現當二世の祖先の利益を願求するもので、近代中國佛教の庶民化の普遍的な一形式といえよう。この法會だけが、専修念佛の總本山靈巖山寺で許されていることは興味深いものがある（一九五七年一月上海佛教書・店刊靈巖山寺念誦儀軌參照）。

ここに、印光・眞達兩師或はその後繼者によつて、年ごとに擴充されてゆく靈巖寺や、月ごとに増加する僧衆の將來のために慎重に協議して、靈巖山寺共住規約・念佛堂規約・客堂規約・庫房規約・班首規約・僧值規約・佛堂大衆一日行止細則・精進佛七儀規（一、維那須知・二、監香須知・三、行前方便・四、正式精進・五、課程時間・六、作務細則）等の諸規約を作つた。これらの諸規約、はもちろん百丈清規以來の傳統のある、從來のものを參照して作られたものではあるが、解放以前としては、最も典型的な新しい規約として、現代中國佛教の生活規範を知る上に不可缺の資料となるものである。さらに後人によつて、印公紀念堂保管規則・印公紀念堂瞻禮規則が作られた。（印光法師は一九四〇年十一月四日、當山で入寂したが、靈巖山中興の祖師として、また中國淨土教第十三祖として全國僧尼信徒の崇敬あつく、その靜養入寂の室を往時のままに保存して、諸人の參觀に供しているが、この規則はその堂宇・遺品類を永遠に保存せんがためである。

解放後の靈巖山寺には、妙眞師を住持としてなお僧衆一五〇あり、念佛・學習・工作と如法な僧侶生活を送つてゐる。民國三十七年印公紀念會刊の「靈巖山志」や、私のメモ等によつて、この寺の生活規範のあらましを紹介する。

四

これらの諸規約の中で、その骨幹をなすものは、もとより靈巖山寺共住規約三十六條である。佛は戒律を制し、祖



中國淨土宗十三祖印光大師

の僧たることを得るのである。次にかかげたこの寺の共住規約によつて、現代中國佛教僧侶の生活規範が、いかにきびしいものであるかが知られ、日本の佛教僧侶の日常生活とは、根本的な相違を見ることができるのである。

一、靈巖山寺共住規約

一、住持は天台・賢首(華嚴)・臨濟・曹洞の何れたるとを論じない。ただ戒行精嚴にして、深く淨土の法門を信ずるをもつて基準とする。ただ賢者に傳え、法系のみをもつて傳えるのではない。かくして、法類のものが寺を濁占する弊害を杜ぐのである。

二、住持は次數(順次)のみを論じ、代數(第何世住持の類)を論じない。高德の僧が、庸徳の僧の後に住持するこ

師は清規を定めて、後世の僧侶の行住坐臥にわたつて守るべきものとした。しかし、あだかも末法の時にあたり、人多く虚偽あり、煩惱を除こうとすれば規繩をつくらねばならぬとして、印光の發意によつて作られた規約が、三十六條中の始めの五カ條である。その後、民國二十七年(一九三八)七月にいたつて、さらに多くの條項を増して、流弊を防ぎ、頽廢した紀綱を整えんとした。これらの各條は、すべて元來法道を維持し、人心を啓迪せんがために設けられたものであり、未來永劫にわたつて、この規約を守るものは、ひとしく無上の道心をおこし、上求菩提・下化衆生

との批難を、すぐわんがためである。

三、傳戒もせず、講經もしない。堂中で日々に講經はするが、外部からの聴講者を招かない。寺衆の正念をみだすことがあつてはならないからである。

四、專一に念佛し、佛七(二四六頁参照)の外は、概ね經懺佛事に應酬しない(雲棲株宏の僧約十章中の、第二安貧樂道約には、俗世の齋法をなす者は出院とするの條項がある。)
雲棲法彙第三。
十三冊参照。

五、何人といえども、寺中においては、自らの徒弟を收め、剃髮させてはいけない。

以上の五カ條は印光・妙眞二師が相談してきめたもので、碑にきざんで批准を得たものである。一たびこの條項に違する者があれば、たちどころに出院とする。(出院は寺外追放)

六、二十歳以下の青年の比丘及び、奇を矜り異説を立てて、本寺の宗旨に合しない者は、概ねその名を寺に留めることができない。

七、根本大戒を犯し、および、ことの是非を挑撥(ちやうはく)し、寺衆を攪亂する者は、出院とする。

八、是非を鬭諍し、惡口を言つて罵りあい、手をあげて打ちあうものは、事の曲直を論ずることなく、一律に出院とする。一方が道理があつてかつ忍び、一方が正當な理由がなくして犯して争う者の場合は、道理ある者の方は罰せず、他は詰問してのち、出院とする。

九、私に朋黨(ひんたう)を結び、或は國禁を干犯して、外事を頂聞(ちやうもん)する者は、出院とする。

一〇、常住物件(じやうぶげん)(寺の什物)を濫用し、或は私に便宜を計つた者は、時價に照して賠償せしめる。(その決定に)
服せざる者は、出院とする。

一一、葷酒(こんしゆ)を喫し、賭博し、阿片を吸うなど、その他不良の嗜好あるものは、罰して後に、出院とする。(寺の)

執事でこのことを知りながら（その人を）舉げない者は、同じく罰する。重病人で酒がなくては治療できない者は、寺衆に白してのちに服用すべきである。

一二、當寺の檀越に對して、私に化緣（募金）するものは、事の輕重を量つて處罰する。（その決定に）服せざる者は、出院とする。

一三、自己が不見識でありながら、妄りに他人の見解を批評し、自己の非を知らない者は、出院とする。

一四、耆徳の僧を輕視したり、惡聞を直言して、妄りに誹謗を生じた者は、出院とする。

一五、動作が衆と異り、執事の命に違つたり拗ねたりして、取締りをこばむ者は重く罰し、その處分に服しない者は、出院とする。

一六、課誦念佛のときに、公用あるか、病氣の者は除く。以外のことで衆に隨はない者は、罰する。

一七、公務を除くの外は、概ね外出は許されない。違う者は罰する。

一八、什物の經典や佛堂諸堂の莊嚴具は、概ね借り出すことは許されない。もし特別の事情があれば、便宜上融通することもある。それには必ず寺衆の許可を経なければならぬ。違う者は、罰する。

一九、毎月四回戒を誦する。重病人で、たちあがることのできない者を除いて、もしそれに列せない者があれば、罰する。

二〇、凡そ水を用い、水を飲む時は、必ず濾過して、蟲の命を傷つけることを免れしめねばならぬ。違う者は罰する。

二一、ひそかに飲食物を造ることを許さない。もし病氣治療のためにするのであれば、必ず執事に申して許可を得なければならぬ。違う者は罰する。

二二、職にあたつてその職務を盡さず、私利をはかつて、公を誤る者は、罰する。

二三、凡そ佛子たる者は、宜しく心を平等にたもつて、海内一家のごとくせよ。もし同郷等によつて、近きを親しみ、遠きを疎にする分別をなすものあれば、罰する。

二四、常住錢(寺の祠堂金その他)・米麥等のものを侵損した者は賠償させてから、出院とする。

二五、公事を除いては、本寮に在らず、各寮に在つてほしきままに放逸する者は、罰する。

二六、用なくんば、二堂(食堂)へゆくことはできない。食時中には談笑してはならないし、坐位を争つてはいけ
ない。また坐席について文句をいつてはいけないし、みなのお事が終らないうちに、先に起つてはいけない。ま
た自ら食器をもつて、厨房に入り、食物を取つてはいけない。違ふ者は罰する。

二七、三々五々と群をなして、三門の外にいたつて遊戲し、雑話したり、ぶらぶらしたりする者は、罰する。

二八、念佛堂内で過ちを犯した者は、その時その時に罰する。念佛堂のものが(この者を)舉げず、堂外の者が舉
げるような時には、堂内の執事も、同様に罰せられる。

二九、各寮で、報鐘を聞いていながら起きない者は、罰する。自分にはたきあるを待んで、調伏に順わざる者
は、重く罰する。

三〇、鬚髪を長くほつておいたり、暑い時、赤膊(はだか)になつたり、褲ズボンの脚すそを縛すそらないなどする者は、罰する。

三一、ひそかに親友を留めて宿泊させた者は、罰する。どうしても宿泊させなければならぬ者は、必ず執事に白
して、彼の指示にまかさねばならぬ。(註、寺の治安を案し、ひいては國事に關與することもあるからである。)

三二、自分勝手に竹木をきつたり、花果を折つたり、またこれを人に送つたりした者は、賠償させてから、責罰す
る。

三三、印光法師及び當寺住持を除くの外は、何人と雖も、歸依の弟子を收得することはできない。違う者は罰する。（註、みだりに弟子を收得することは、寺の秩序を紊し、また寺の經營を危くするからである。）

三四、冬期に火をもやすことは、一切許さない。もし公事や老人病者でどうしても必要な者には、ただ手あぶり・脚あぶりだけ使用することを許可する。火盆・火桶は失火のおそれがあるから、使用してはならない。違う者は罰する。

二五、什物その他平常使用のものは、注意して愛護すべきである。もし毀損したときは、時價に照して賠償せしめる。違う者は罰する。

三六、夜間休養のときは、高聲して衆を驚かしてはならぬ。また必ず戸締りを十分にし、火の用心を嚴にしなければならぬ。違う者は罰する。

以上の各條は、本來法道を維持し、人心を誘導するために設けたものである。現在より未來に互つて、本寺に住する者は、ひとしくみな無上の道心を發して、如來の慧命を擔い、身自ら範となつて、上は佛道を弘め下は衆生を化する人達ばかりである。どうして、一々條項を擧げてのちに、まさにはじめて遵守して犯すことなどということがあろうか。願くば諸國人よ。おのおの自ら勉められんことを。民國二十七年七月。本寺住持および各執事がともにしかつてさだめた。

以上の三十六條の共住規約が、十方專修念佛道場としての靈巖山寺に住する僧侶が、必ず守らなければならない生活規範の大本となるものである。數十百人の大衆の共同生活にあたつては、いかに嚴しい規範が要求せられるか、その方面には殆ど無關心にも近い日本の僧侶として、感慨深いものがある。日本では短期間の僧堂修行中にこそ、このような清規の條々が室内に掲げられてはいるが、日常の生活規範は殆んど無きにひとしい。中國では、この寺に居

住する限り、或は中國に在る諸大寺に共住する限り、この厳しい生活規範が、僧衆の全生活を支配するのである。この靈巖山寺共住規約は、一山大衆がともに食事する食堂の正面に大額にぎざまれて、掲げられている。

靈巖山寺が専修念佛道場としての眞面目を發揮する道場は、民國二十二年（一九三三）に竣工した念佛堂である。西方三聖像を奉安し、大衆の六時念佛の場となつてゐる。二階は藏經樓で、影印宋碯沙藏經・日本續藏經等が安置されてゐる。左右兩翼の小寮が蓮侶靜室とて、僧侶の休憩・靜思の部屋となつており、念佛堂の後は、功德堂とし、回向を依頼し、また當寺と有縁の、檀信の蓮祿位（位牌）がまつてある。これは、昨秋私達が各地を旅行したときにも、南京毘盧寺・蘇州靈巖山寺その他の諸大寺でもしばしば見かけたものであり、個人では水陸法會等の經懺の大法會は、もはや今日の經濟狀態では行うことは不可能であるが、その代りに、わずかの布施を獻じて、有縁の先亡の人々の靈位に誦經供養していくことが、以前に比較してよく多く行われることになつたのであろう。

この念佛堂は、凡惱に縛せられた凡夫が、現生中に、凡夫の境界から聖者の境界に入らんがための、大冶金爐である。この堂に入らんとする者は、まさに萬縁を放下して専修念佛し、二六時中、専ら念佛し、専ら淨土を願求すべきである。しかも末世の凡夫は、罪障深く、福縁淺く、規範の力によらなければ、到底専修念佛の境地に入り得ないとして、次の規約がつくられたのである。

二、念佛堂規約

一、凡そこの堂に入る者は、専ら念佛を以て宗となし、淨土の法門を誹謗することを得ず。違う者は罰し、改めざる者は、出院とする。

二、念佛の宗旨がわからなければ、すべからく、高德の僧に請問せよ。邪見を固執し、或は愚に安んじて學ばざる者は罰し、改めざる者は、出院とする。

三、(朝暮)二時の功課・六時の念佛には、正當の理由なくして衆に随わない者は罰する。

四、念佛の餘暇に經論を閱讀するには、ただ淨土法門及び戒律に關係あるものに限り、他宗に渉ることはできない。違ふ者は罰し、不服の者は、出院とする。

五、課餘の時、ベッドの上で休息するとき、或は佛前で禮拜するとき、或は跏趺して默念するときには、閑談雜話

當勤精進如救頭然
但念無常慎勿放逸

己卯夏釋印光書

年々
十九日

印光大師墨蹟

したり、席をみだしたり、寮にかくれたり、勝手にいろいろなことを教えてもらおうとしたりすることは許されない。部屋の中では聲を低くして語るべきであり、もし他の人の長所短所を評したり、是非を論じたりした者は、罰する。

六、めんどろな事をおこして威儀を失し、執事のいさめを聴かない者は罰し、不服の者は、出院とする。

七、靜中に昏沈する者は、當然下席の方で禮拜せよ。もしうつらうつらとぼんやりして、巡撫の者が、これを拂過すること三度に及ぶ者は、下席にうつつて禮拜せなければならぬ。違ふ者は罰する。

八、念佛及び殿堂には、輪番で當直し鍵椎を打つ。當然すべき時に當直せず、またことさらに、錯まつて鍵椎を打つ者は、罰する。

九、病氣や特別の事故ある時は、まさに執事に向つて休暇を請うべし。もし自由氣ままになす者あれば、罰する。

一〇、常住（住持）がもし用事あるときは、すべからく衆とともに、勤慎して事に従わねばならぬ。うまく逃れて安逸を偷むがときは、罰する。

一一、凡そ、その他の規制に従わず、越軌の行爲ある者は、時により、事によつて（事宜によつて）合議の上、責罰する。

一二、所定の期限が満たない限りは、念佛堂から出ずることを許さない。公職に充任される場合を除いては、擅いままに自ら休暇を願う者は、罰し、遵わない者は、重く罰する。

一三、本念佛堂の宗旨は専ら稱名を相續することにある。凡て此の堂に入る者は、必ず一律に稱名念佛すべきであり、黙して聲を出さない者は、罰する。

一四、尊客の入堂はおのおの所定の順次により、威儀をみだすことはできない。違ふ者は罰する。外に出る時に、執事に白さず、海青（廣袖の法服）を着用せず、歸堂の時間に違つた者は、罰する。

一五、凡そ外に在つて過を犯して責罰を受けた者は、堂に回つてからも、當然また責罰を受けねばならぬ。受けない者は、重く罰する。

以上の規約を、同人に期望するゆえんは、四儀（行・住・坐・臥）を嚴肅にし、勇猛な精進^{はつじん}を實行し、大菩提心をおこして、白蓮社の遺蹤を追ひ、金臺（極樂界）への先導となつて、釋迦の教を無窮に振響せしめるならば、これこそわれわれの希望するところはすべてつくされたものであるからである。民國二十七年七月に、本寺の住持や各執事が共同でさだめた。

印光法師は、民國十九年から蘇州報國寺に留錫し、閉關の修行をしてきたのであつて、靈巖山に常住したのは、不幸な日本と中國との戦争が始まつてからである。眞達・妙眞兩師の畢生の努力精進によつて、靈巖山寺が江南の名刹

として復興したさいに、いかに妙眞師等が勸請するとはいえ、いかにも功を印光一人に歸するときことを避けんとする心意からであつた（一九五四年四月靈巖山寺刊印光大師畫傳）。戦火が蘇州にも及ばんとするにいたつて、民國二十六年冬に、やむなく難を靈巖山に避けたのである。しかも印光師の靈巖山寺居住によつて、遠近の、徳を慕う僧侶や檀信が戦時中にもかかわらず雲集して、靈巖の道風を高くしたことは記憶されなければならぬ。この一山の中心をなす念佛堂規約も、印光法師在山中に合議の上で定められたのである。

大雄寶殿の左右に東客寮（香嚴廳）・西客寮があり、それぞれ五間、なおその前面に尊客寮・上客寮があり、外來の檀信・僧衆などは、それぞれに應じた客寮に安止するのである。直接、外部から人々の折渉の場にあたり、その職にあたる知客（知客は勅修百丈清規にも記すように、もと賓客を掌るもので、官員・尊宿・檀越・諸方名徳の僧を始め、この寺をよぎる客衆について全責任を負うものである。）や、客寮に住まる僧侶の人達の遵守すべき規範が、客堂規約と呼ばれるのである。

靈巖山にあこがれ、印光法師を慕う多くの人々の中には、なお甄別を要する人もあり、靈巖山寺の平和と發展のためには、同入和合海の念佛教團にも、客堂規約が嚴然と規定されているのである。

三、客堂規約

一、内外の諸師、用事があれば客堂に申すべきである。日直の知客は直ちに事を處理すべきであつて、放置することとはできない。もし、口角相争うて客堂に申す者あれば、公平に直言する。もしその處置に服せざる者あれば、大衆に請うて、知客が處罰を公議する。なおもし遵わない時は、擯斥して、出院とする。もし知客等が私情にこ

だわり、その處置が不公平であれば、併せて知客をも處罰する。

二、客僧が來た時には、一樣に扱つてはならぬ。凡そ諸方の長老・名宿・耆徳の僧で、常住（住職）や多くの執事と交誼のある僧の場合は、香光廳に入つてもらふ。寺に功績のあつた舊職の僧が歸來した時には、香嚴廳に入つてもらひ、次なる者は尊客寮で休んでもらう。遠來の僧で、初參晩學（修行者）で、掛單（留錫）の資格を具足している者は、みな雲水堂に送る。その他の、地方の身許のはつきりせぬ僧（江湖混雜之輩）は、晝間なれば、一食を供してのちに他に去くことを請ひ、晩に來た者は下院（末寺・靈巖山麓にある。）に送り、夕朝食を供して、翌朝他に去つてもらふようにする。混雜して誤つてはいけない。

三、凡て當寺に住せんことを求むる者には、先ず、共住規約及び念佛堂規約を熟讀せしめ、その後、再び多くの職分のもと會して、その志願のほどを觀察し、誠心參學することを確認した上で、再び方丈の許可を経て、志願書を提出せしめ、しかるのちに始めて安單する（とどまる）ことを許す。邪知邪見、粗野頑迷の者は、のちに寺衆を妨げることにないよう、みな濫りに寺に入ることを許さない。

四、客堂の衆職者で諍聞を生じたときは、諸僧人の筆頭者の仲裁と、方丈の裁斷に待つべきである。強引に偏見をもつて、同和商議することを肯んじないで、寺の事務遂行に礙となつてはいけない。違ふ者は、罰を倍にして、出寮とする。

五、客堂のすべての事務について、或は權を専らにしてわがままなことをしたり、或は同僚相互に嫉妬したり、私情をもつて偏袒したりする者については、衆首領に申して、罰を議すべきである。

六、諸師の中で共住規約に違反したものは、必ずこれを擧げ、必ずこれを罰すべきである。姑息にしてこれを行わないときは、執事人において、同じく過咎をおうべきである。

七、客房牀帳等の一切の物件は、ともに如法に點檢せよ。ひそかに一切の外單や、もろもろの間住（遊休品）も借ることはできない。もし使い古したものを以て、新品とかえたものは、一を二にして賠償せしめる。賠償することのできないものは、責し已つてから出院とする。（僧堂に外單（外單）と内堂（あり暫刻の者は内堂に入れない）がある）

八、外から掛單（留錫）する者には、必ずその所有する衣單を検査するを要する。もし衣鉢を傳えた證據となる戒牒をもたず、またその行動の疑わしい者は、概ね留單することを許さぬ。もし一たびそのような者を容れんか、おそらく禍を招くであらう。

九、用事もないひまな人が、寺にあつて何かと事をおこすような時には、當直の知客は、まさに必ずこれらの者とすとすべきであり、坐視したり、畏縮（おそれ）して放任しておくことはできない。

一〇、凡そ外國の賓客が、ここに參觀に來た時には、すべからず、つとめて懇勸に取扱ひ、禮を以て招待し、不都合な仕儀があつてはならない。もし質問された場合には、慎重に回答せよ。妄りに國事（政治）に互つて談じてはならない。違ふ者は罰する。

一一、凡そ僧俗の起單（留錫の期がみちてまた他へ出發する）する者には、詳細に單物を調査して、あやまつて、常什物を携えて出ることのないようにしなければならない。でなければ、よく誤つて失うことのありがちなものである。

一二、凡そ寺に來るすべての人々（始めての人、よく知つた人も、或は郵便を送り、或は物を送つたり、或は面會して歡談したりなどする時は、當直の知客は、必ず一々查詢（しらべ）しなければならない。各自が任意に招待して、誤りがあつてはならない。

一三、疑わしい人に遇えば、まさに外面は恭順の態度を持ちながらも、内心は用心深くしなければならない。一概

に軽く信じて、失敗があつてはならない。

一四、施主が設齋（飲食を供養する）・散賑（財物を布施する）する等のことについては、副寺（フツス）（監院の副とも稱すべき、寺院經營上の重責者）に協同して、如法に辦理せよ。

一五、未知の客が來つて寄宿を求めた時には、詳かにいままでの足どりをただし、かお・かたちなどを看て、留宿さすべき者でないときは、婉曲に、これをことわらねばならない。

一六、正當直の知客は、客堂に關して全責任を持つ。副當直の知客は功德主の回向・隨喜・念佛及び飯食のことについて世話をする。他の當直は、事務の多寡を看察して、隨時に協助する。

一七、凡そ來山する特別の功德主（大檀越）には、擔任の知客一人を定めておき、隨時に世話をする。この佛事が終るまでの期間、事を誤つてはいけない。でなければ恐らく施主に禮を失するか、或は施主をして輕慢の心を生ぜしめるか、いずれにせよ、道俗兩つながら損うことになるからである。

一八、知客の任にある僧は、當直日でなくとも、外へ出歩くことはできない。もし客堂に用事が多ければ、必ず當直者をたすけてともに仕事を處理しなければならない。

一九、當直の知客は、用事の有る無しにかかわらず、必ず客堂で靜に候つていなければならない。そうでないと、必ず失態をいたすであらう。

二〇、知客は用事のないときには、客室より大殿にいたり、念佛すべきである。病氣以外の者は、必ずそうすべきである。

二一、官員の來山につき、正式の帖が到るときは、即刻に方丈に通知すべきである。知客は、まず應接をなし、方丈まで送つて行き、誤ちがあつてはならない。

二二、客が至れば茶湯菓子よりふとんまで一々世話をせよ。もし面識がなければ、ただちに名前と住所を問ひ、疎慢にして失態をいたし、外からのそしりを招くようなことがあつてはならない。

二三、凡そ招待の遊客は、すべからく、その行動の宜きを得て、僧たるの品格を失わぬようにしなければならぬ。不慢の來賓を度となす。國事を評論し、みだりに、住持の是非を談つたりしてはならない。

二四、もし當直の僧缺席せば、知客が殿堂の公務及び、なすべき一切のことを行わねばならぬ。

二五、病僧あるときは、常時に慰問せよ。危篤にいたつたときには、直に維那師に通知し、人をつかわして、交互に口稱念佛を助けねばならぬ。往生の後、満一晝夜經つて、はじめて念佛を止めるのである。知客や僧値は、副寺に協力して、亡僧の遺品を整理し、帳簿に書きつけて庫房に保存しておく。七日して荼毘の後、大衆等と會同の上、客堂にて如法に處分し、亡者の冥福の資とするのである。

二六、凡そ、女居士が知客の寮房にいたつて、事をたずねたり、談話したりするときは、ただ一二語を應酬するに止めるべきである。もし長時にわたつて談話するときは、婉曲な言葉で室外に出てもらつて、話をし、他人の譏嫌を招くことのないように、すべきである。

二七、知客が、用事のため客寮にいたるときには、まず聲をかけて中の様子を知るべきである。もし室内に、女客一人しか居ないときは、入つてはならない。侍役に命じて、室外に出てもらつてから、用事を話すべきである。尼僧の場合も同様である。

このほか、寺の常住物（什物）を保管する庫房に關する規約（庫房規約）があり、十三條に分けて、毫末も私することのないよう、節儉を期して濫費することのないよう、庫内の一切の什物はすべて帳簿に明細に記入して、いかな

る時の検査にでも應じられるようにすること、庫房の執事は交替の時は、前任者は新任者に、逐一點檢して交付するように注意することが規定されている。

また住持・監院等の目の及ばない所にまで目を光らし、朝から晩までの僧衆・檀信徒等の出入などを嚴重に監察するものに僧値がある。これは一に直歳ジッサイと呼ばれるもので、靈巖山寺では、また糺寮と呼ばれる。公平無私の態度で、阿諛せず、不偏不黨で、事にあたり、鍵槌の打ち方にも氣を配り、内外とも禮儀を保ち、道路の清潔にいたるまで、その責任の中にある。僧衆は輪番で僧値にあたり、この職に充てられた者は、たとえ住持・執事であろうとも、過ちがあれば必ずこれを舉げ、失策があれば必ずこれを罰し、いささかも私情をさしはさんではならないのである。

四、僧 値 規 約

一、叢林に僧値が無ければ、寺の内外が整わない。しからば、何を以て弊害を除き、何を以て法を立てようとするのであるか。すでに僧値となれば、宜しく心をつくして糺寮につとめ、私情にこだわつてはならない。もし犯すものあれば、條項に照して處罰する。もし罰を免れた者があれば、僧値が罰を受ける。

二、朝晩のおつとめ、二時の粥飯及び念佛堂外の一切の僧事は、よく事情を見きわめて、とりなさなければならぬ。それらが一々如法に行われれば、常住の道風・大衆の慧命に關係する所は決して輕くはないのである。つとめて勤慎して、事にあたりねばならない。

三、職務を恃んで衆におごり、公に假りて、私のために計つてはならない。違う者は罰する。

四、凡て各部門の執事は、宜しく體恤善用し、自己の職務を恃んで欺いたりして、他の人に心を輕んじたり、怠慢

をつげさすなどのことがあつてはならない。

五、時々、大寮で、一山大衆の食事について必ず清潔・如法に行われているかを検査せねばならぬ。また食事の時間についても、早粥（朝食）は夜明前、午飯は十一時というのが基準であり、誤りがあつてはならない。

六、問寮及び外單にある諸師が、公事を除くの外、大殿念佛堂にいたつて念佛せず、寮にかくれて閑談したり、そのかして人の是非をあげつらつたりして、佛道と相應じないような事は、すべからず隨時に點檢せよ。その説得を聽かないような者は、客堂に伴うか、或は丈室に申して處罰せよ。もし私情にこだわつてその罪を擧げない者は、罰せられる。

七、凡そ事あるときには、あらかじめ衆に先んじて、使用すべき物件をも準備し、時至れば魚板を打ち、大衆がつとめて作務するように督勵せなければならぬ。もし安逸を偷んで作務に参加しない者があれば、隨時に點檢せよ。大目に見逃すようなことがあつてはならない。ことが終れば、使用したものはすべて原處に安置する。

八、誦戒の日には、必ず病僧を調査し、その能く行える者は、一律に衆とともに布薩し、病重くて起床できない者は、本人がそのことを僧値に請わしめる。

九、企歸軒に在る病人を、時々慰問し、かつ病人の勤惰の狀を査察し、愛語をもつて、これらを勸勉せなければならぬ。はげますのに慈悲・福田をもつてし、いたずらに呵責を加えてはならない。もし病勢が危篤におちいたときには、維那と相談協力し、情形を見きわめて、人々の助念を請わねばならぬ。もし命終とならば、全寺の衆僧をあげて、輪番して葬送にあたる。亡者の沐浴・入棺・茶毘・入塔（納骨）にいたるまで、隨時に世話し、簡略にはいけない。

一〇、外單の諸師（遠方からの留錫の僧）で病あれば、人を派してその職務を代行せしめる。病勢の甚だ重い者

は、丈室の指示を請うて、適宜處理する。

一一、朝粥後ならびに日没後の三門の開閉は、よく督察せねばならない。朝粥前に用事があつて門を開けば、また必ず門を閉め、誤りのないようにせなければならぬ。各堂宇の門戸、各寮の火燭等についても十分に詳しく點檢し、疎忽であつてはならない。

一二、非常に暑いときに、袈裟をぬいで食事し、或は起止の時期などは、みな首領と相談して、方丈に申してのちに實行すべく、專擅であつてはならない。

一三、知客と協同して、客堂の一切の事を、手助けして行わねばならぬ。また客堂の規約は、一律に遵守すべきである。

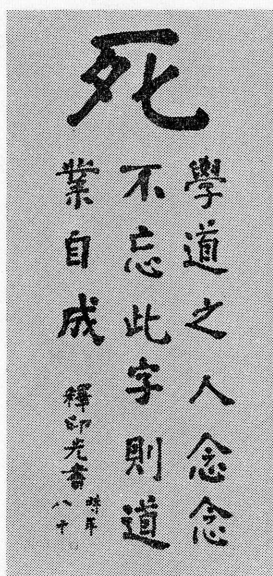
靈巖山寺には、企歸軒という病僧休養のための建物が用意されている。本來は如意寮と名づけられているが、企歸の持つ意味は深い。梵網經に説く八福田の中では、「看病福田は第一の福田なり」と言われ、また世間の諸苦の中では、病苦が最も深刻である。靈巖山寺に蜎集する衆僧の中、病氣となつた者は、この企歸軒において専ら養病第一の日々を送るのである。病床に呻吟する者を看護し、慰諭し、往生の時節が來れば、口稱助念などによつて、その業を扶けるのである。しかも、如來大雄（佛）すらなお病氣におそわれる。ましてわれわれ凡夫にあつては、今健康の身も明日を計り得ないものであり、自分が病氣になつたつもりで、看病にあたるべきことが、企歸軒規約に詳かに規定されているのである。

五、企歸軒規約

一、軒内の大きい寮房では軽い病人が、小さい寮房では重病人が、静養する。それぞれ世話をして紊亂があつてはならない。

二、病人の衣服や布團が、薄くて寒さを禦ぎがたい時は、看病人は庫房から暫時借用することができる。使用の目的が終れば、すみやかに還して、放置したり、またがししてはいけない。

三、軒内は何時も掃除をして清淨にし、病人の衣服類は必要に應じて洗濯せよ。薬餌の世話も、よく心をくばつて調劑し、怠つてはいけない。



印光大師墨蹟

四、軽い病人は自分で二堂に行き食事をせねばならぬ。二堂に行くことのできない者は、看病人が代つて、大衆と同じ食事を貰いに行く。病が重くて粥のほしい者には、看病人が代つてこしらえてやる。大衆を食ふことのできない者は、看病人が代つて客菜を取るなど、病狀に應じて適宜擇ぶが、濫りに與えて、却つてその病を悪化さすような事があつては

ならない。

五、病人がもとめる醫藥やその他の必要な物は、看病人が庫房に請求して受領し、その價格に應じて本人が支拂う。確實に貧乏である者には、常住（住持）が支給する。因果おそれ、各自おそれつしまなければならぬ。

六、もし患者が多いときは、看病人は維那に申して、人の手助けをこうべきである。

七、看病人は病人に對して嫌憎穢惡の心や、態度があつてはならない。その意にさからつて、さらに病を重くするといふようなことがあつてはならない。(看病人が) 長らく病床から離れて、病人が何かをして欲しいときに、傍に誰も居ないといふことのないようにしなければならぬ。貪りや狡猾な量見で、ことさらに難を作すことがあつてはならない。病人のうるさいことでも、瞋や厭氣を起してはならない。ただ一心に福を作せ。病人に酬謝を貪つてはならない。まさに八福田の中には看病が第一であることを知つて、勇躍して職務をつくさねばならぬ。

八、看病人は病人に對していつも善語をなし、惡語を傳えてはいけぬ。微に入り細に入り、かゆいところに手がとどくように看病せよ。ついで、臨終の時には、多く惡業が現前して、つとめて排除しようとしてもできない。そこで特に方便を設けて、善巧もて誘掖して念佛せしめ、佛像に供養して、語つて見せしめて、迷からさめて、救をもとめて加護あるようにする。もし、もはや病人の知見がはつきりせず、(淨土往生の) 信願がはつきりしないときは、すべからず方丈か或は首領に請うて、善言もて開導し、淨信を堅固にささねばならぬ。

九、軽い病人は、宜しく安靜にして、念佛にはげむべきである。もし身體を大切にしないで、室外に出歩くものは罰する。

一〇、病人が軒に入つて保養して、もしすでに飲食がもとどおりとなれば、すぐに軒を出て休暇を取消し、多くの日時をのばして、淨業を荒廢することのないようにせなければならぬ。

一一、重病人は、軒に入れば、まさにすべて後事を付托して、萬縁を放下し、専ら一心に念佛して往生を願求せよ。生を貪り死をおそれ、妄りに藥餌を信じて、自ら淨願に違ふようなことがあつてはならない。

一二、重病人に對しては、看病人は晝夜ともつきそひ、擅にそばを離れてはいけぬ。もし病人が危篤に陥れば、

すぐに執事に申して、人の助念（口稱念佛）を請い、危篤の状態を脱離するか、或は壽命が盡きて死んでしまうまで、つづけるのである。

一三、病者命終のときは、看病人は執事に申告し、僧侶より維那と共同して、人をつかわして班を分つて助念し、上は和尚より始まつて客僧にいたるまで、すべて病床にのぞんで津送（葬送）する。

一四、助念する諸師は、病者と世情について談じてはいけない。もつぱら娑婆を厭離し、安養淨土に歸らんことをつとめ、これをすすめなければならぬ。もし病者が命終のときには、さらに懇切に助念して、佛の大慈の加被あらんことを願求せよ。亡者の善根を啓發して、神の淨域にいたり、自他ともにふたつながら利せんことにつとめねばならぬ。

一五、何人といえども、亡者の遺體を探摸することはできない。また、亡者の臥榻を震撼させてもいけない。まだ亡者の識が去りつくさず、正念往生を妨げることを恐れるからである。命終して一晝夜を経てから、まさに看病人が探摸することをゆるすのである。さらに全身が冷透してからの中に、始めて沐浴を行い、衣を改めさせ、棺に入れ、窖に送る。ここにいたつて、念佛の聲は止むのである。待つこと七日、始めて茶毘を行う。

一六、亡者が、暑いときであつたり、臍脹病であつたりして、多く時間を延ばすことができないときには、遺體が冷透になつたら、棺に入れることができる。茶毘の時間も、それに準じて、くりあげて行うことができる。

一七、亡者の遺品は、命終後四時間たつてから、看病人が僧侶・副寺・知客等と立會つて、一々の品について、きちつと帳面につけ、點檢して庫房にしまう。ただ病榻の上の品物は移動することはできない。亡者の遺體の沐浴納棺の二時間前になつてから、まさにこれらの品を検収すべきである。茶毘が畢つてから、看病人を犒い、かさねて如法に處分し、もつて亡者の冥福の資とし、蓮品（九品）の増高をはかるのである。

靈巖山寺では、以上のような規約の外に、「佛堂大衆一日行止細則」がある。これは早朝の起床から就寝までの一日の日課表ともいべきものである。洗面の方法・大殿での禮佛の作法・食作法に始まり、身邊の些細なことにまで、種々の規定があり、これらはいずれも、「人命無常、死生事大、欲成淨業、當勤策勵」の趣旨にもとづいて、僧衆が淨業を達成するためには不可缺の條件であるとされる。もとより、この行止細則は、おおむね佛制にあるもので、楊枝の嚼み方、大小兩架（大小便）での手の洗い方、大便所の清潔など、すべて、古制に記すごとくである。

また、當山での大きな収入源となつてゐる「佛七」についても、「精進佛七儀則」があつて、こまかに諸般の事項を規定してゐる。

しかし、當靈巖山での重要な生活規範としては、共住規約・念佛堂規約・客堂規約・僧值規約・企歸軒規約などであつて、これが民國二十六年頃（一九三七年）に概ね完備を見たのである。おそらく、中國現代の佛寺としては、最も新しい生活規範の典型であらうと思われる。解放後は、これらの生活規範の大前提として、

社會主義社會の建設に協力せざる者は出院とす。

が加つてゐることは當然である。しかもなお、この生活規範が共產主義下の中國に、現に生きてゐることは驚異というよりはかはないのである。

五

解放後（中國共產黨の全中國制壓以後をいう）の、中國佛教については、述ぶべきことはまことに多い。今はしばらく措いて、ただ、代表的な新中國僧侶の一人として、中國佛教協會副會長の重責にある巨贊法師の、中國佛教徒の生活についての意見を紹介することは、今日の中國佛教の性格を知る上に、全くは無意味でないと思われる。

彼はすでに民國三十一年（一九四二）に、廣西省桂林佛教會から派遣されて、梧州上流の桂平縣にある思陵山に赴いて、龍華・洗石の二寺を合併し、新に實驗叢林を設け、新佛教改革運動に従事していたほどであつて、彼の新中國佛教再編の構想は、十數年の昔に兆^{きざ}していたのである（巨贊師については、昭和三十年八月二、三日の中外日報連載の拙稿参照）。

昭和三十三年十月三日、北京市の新僑飯店で催された日中佛教座談會の席上、巨贊師は、中國佛教の精神は一千數百年來、出世を眼目として今日に到つていると前提して、中國佛教僧侶の生活規範について説明した。まず、杜甫の作と伝えられている左の詩をかがけ、たまたま古寺に遊んだ杜甫と、彼がその縣の知事であることも知らない老僧との問答から、世俗の出來事に就いては何等の關心をも持たない寺僧の中に、杜甫は眞の佛教の意味を悟つたといふのである。

家住城南杜曲傍

家は住す、（長安）城南杜曲の傍ら

五枝短桂一齊芳

五枝の短桂一齊に芳し

禪師都不知名姓

禪師はすべて名姓を知らず

始識空門意味永

始めて識る、空門意味永へなるを

この詩がたしかに杜甫の作であるかは疑わしい。然し、今の巨贊師の場合、杜甫の作であるか否かは問う處ではないのである。この老僧の中に見出される孤高の精神にこそ、中國佛教の千數百年に亘つて貫きつづけてきた僧尼の生活規範が求められるという。今日まで戒律と清規の範圍の中で守られてきた中國佛教の傳統は守り續けて行きたいというのである。出家の眞義には徹してはいるが、現實社會からの隔離という、この消極的とも思われる生活規範を根底として、今日の社會主義社會の建設という大前提の事態に、佛教教團の活動を、如何にして、より積極的に協力させるかということが、いま私達が當面している大問題ですと、巨贊師は結語した。

この靈巖山寺の、建物と建物をつなぐ廻廊の柱には、數多くの金言が揭示されていた。同行の村瀬玄妙師の筆録したものの中からも、次のようなものが見られる。(昭和三十二年十二月刊、私
の見た新中國の横顔下巻)

一、人を責める心で、己を責めれば過は少い。あやまち

二、石火光中歲月常なし。急に正念をひつさげて、空しく過さしてはいけない。

三、勤學は立身の本、節儉は養德の源なり。

四、瓜を種えれば瓜種を得、豆は豆、因果の循環すること、かくのごとくでないものはない。

右に擧げた數個の金言は、必ずしも住僧のみを目的としたものでなく、おそらくは參觀の人士をも目的として、書かれたものであるかも知れない。しかし寺に常住する僧衆にとつては共住規約等の諸制規とならんで、このような日常生活の儒教的な倫理も、きざみつけられることであらう。

それにもまして、解放後の社會の大變革は、靈巖山においても、從來のような僧侶の生活規範を存在せしめるであらうか。

現在一五〇人の僧衆が、住持妙眞師等によつて統率されている。民國三十一年(一九四二)五月に、當山を訪れた王蓮舫居士の「靈巖山寺遊覽記」にも、寺内近住の僧衆一百四五十人とあるのを見れば、今も、專修念佛道場としての權威が失墜していないことを知るのである。(民國三十年九月刊
弘化月刊第三期)僧衆は、學習・修持・工作(事務と勤勞生産)の三部に分れ、輪番でそれぞれにはげんでいる。簡易な佛學院の設備もあつて三十人の學僧がいる。寺には政府から貸與された百畝の土地があり、これを耕すことも寺僧の重要な任務の一である。蘇州地區に、本年六月十日ごろに小麥の收穫期を直前にして、暴風雨が襲來するであらうとの氣象特報があつた。よつて靈巖山寺の僧衆たちは、五日かかる豫定の收穫日を三日間で終るように努力し、蘇州市の天主・基督教會の人々二十六人もこれに協力して、暴風雨の被害

から完全に免れたという。(現代佛學一九五八年八月號)

この一五〇人の生活を維持する收入(經濟來源)は、信者の寄附・勞働生産よりの果實・參觀者接待による收入等が重要なもので、ことに參觀者收入も重要な度合を占めているのではないかと想像された。しかもこの寺の僧俗とも一七〇人は、一九五七年度の國家經濟建設公債の購入について協議し、その必要を認識して、昨年に比して百分の十七増の公債を購入することを議決し、多年貯蓄した銀貨類を一齊に提供したと伝えられる。(一九五七年四月上海市佛教協會編弘化月刊)

旅行中に、私の見た中國佛寺の中では、靈巖山寺と天台山國清寺が、未だ古叢林のおもかげを残しているようであった。ことに、この靈巖山寺で、印光法師の遺教もおごそかに伝えられ、如法な專修淨土道場の風格が十分に感ぜられた。この風格の骨幹となつたものが、如上の各種の生活規範であることは論ずるまでもない。

中國佛教協會の重要幹部の一人である濟廣師の記錄によれば、湖南省南岳の各叢林の齋堂の入中には、次のような詩がかかげられているという。(現代佛學、一九五六年二月號)

法輪未轉食輪先

行道全憑助道緣

嚼破虛空骨裏味

鉢盂開口笑青天

佛道修行には、生活のうらづけがなければ不可能であるとの意を諷したものであり、これは、同時に、佛教徒も實際の生産工作に参加すべきであり、たとえば國家が食糧増産を急務としている今日、當然に農村の僧衆もこれに参加すべきことを暗示したものとと言える。今日の中國の社會相より言えば、もつともな考え方でもある。しかし、このことは、道心之中自有衣食として、まず、精神的の面を重んじた從來の佛教の指導精神とは、自ら立脚點が異つてくる。ここに、從來の指導精神にのつとつた種々の生活規範の類についても、當然問題が生じてくるのである。

一九五七年三月の中國佛教協會第二回全國代表大會でも、某代表によつて、中國僧尼の服裝改善問題がとりあげられているし、成都地區の慈青代表によつて、叢林清規の改變について意見が提出せられている(現代佛學一九五七年五

月號)。これらは、解放後の佛教界の新事態に處するための一連の動きであらう。

一九五七年二月二十日から五月十二日まで、靈巖山寺では、僧衆で愛國主義學習班を組織して、偉大なる祖國・國際問題・八大文件・憲法等について眞摯な學習が行われたのである。その結果は祖國を愛し佛教を愛することについて、一層の積極性を得たといひ、「いかにして靈巖山寺を好くするか」について、十數次の座談會が開かれ、各種工作の缺點の改善・社會主義社會の建設に協力することを明記した共住規約の修訂等が議せられた。(弘化月刊一九五七年六月號)遺憾ながら、この共約規約の修訂案について、私は報告すべき詳細な資料を持つていない(本年六月、靈巖山寺妙眞師に照會したが、未だ返信に接しない)。しかしながら、おそらく、今日の中國佛教界僧侶の日常生活における指導精神の變化が、印光法師の教化に依る、精神第一主義の共住規約を、修訂せざるを得ない立場に、いたらしめたものではなからうか。

しかし、いづれにせよ、中國の僧侶生活のきびしい規範がたやすく、くずれさるとは考えられない。この淵源が自國で生れた儒教を政治の傳統的な骨幹としてきた中國社會の現實性や、この特質に對應し、一千數百年來そのような社會の中にあつて、佛教の獨自の立場を闡明しようとした中國佛教の孤高性などにもとづくものであることは推察される、そして、そのようなきびしい僧侶獨自の生活規範については、無縁の存在かと思われるような今日の日本佛教徒のありかたについても、きびしい批判と反省が要求されると思料するのは、筆者一人のみの見解ではなからう。

中華人民共和國における黨の宗教政策や、佛教界の現状・動向等については、近い將來に別に報告する筈である。よつて、これらに關して當然本稿についてふれなければならぬ問題も、敢て記さなかつたことが多いことを諒とされたい。(昭和三十三年九月十六日)再校の日、妙眞師より、靈巖山寺共住規約・念佛堂規約が時勢の進展に依據して、やや修改があつたとの返信に接した。詳細は不明である。(十一月二十四日)